「ラストピース」　第８話

水瀬真理佳

〈登場人物一覧〉

鈴木理菜（１２）（１８）大学１年生

高橋湊（２３）理菜のアパートの隣人

花村夏凛（１２）（１８）理菜の親友

市川拓也（１２）（１８）理菜の親友

西原圭吾（１８）市川の友達

成宮翔（１８）市川の友達

白水透（５４）バーのマスター。

佐々木俊哉（４５）ニュースサイトの編集長

塚目凛子（３４）護身術の師範

女性

大学院生Ａ

大学院生Ｂ

○バー・店内（夜）

スタッフはマスター・白水透（５４）だけ。

カウンター席には編集長・佐々木俊哉（４５）と師範・塚目凛子（３４）。

他の客はいない。

扉が開いて、

白水「いらっしゃい」

入ってきたのは死んだ目をした高橋湊（２３）。

白水「なんだ湊か」

佐々木「いいとこにきた！」

凛子「湊も一緒に飲も飲も！」

高橋、白水の前に座って、

高橋「……一番強いやつください」

白水「バイクは？」

高橋「……置いてきた」

白水、黙ってショットグラスに酒を注いで高橋の前に置く。

高橋、ショットグラスを一気に流し込

み、空になったグラスをカウンターに置く。

高橋「……もっと強いやつ」

佐々木「おーおーいつにも増して飲みっぷりいいな」

白水、黙って別の酒を注ぐ。

×　×　×

高橋、カウンターに肘をついて泥酔。グラスに酒を注ごうと、酒瓶を掴む。しかし佐々木が高橋の手首を掴んで酒瓶を取り上げる。

佐々木「その辺にしとけ。ここは酒を飲むとこだ。酒に飲まれるやつはさっさと帰って寝ろ！」

高橋、とろんとした目でカウンターに顔をつける。

凛子「湊がこんなに酔うなんて初めてじゃない？」

と、高橋の隣に座って背中をさする。

高橋「俺、バカだった……」

佐々木「はぁ？」
高橋「理菜のこと探し出して、わざわざ同じ大学まで入ってさ。ＳＰ気取りで張り付いて。マスターに安易に近づくなって言われてたのに、ほんと何やってんだろ……」
凛子「湊……」
白水、黙って話を聞く。
高橋「気づいたら自分の中で、理菜の存在がどんどん大きくなってた……」
佐々木「要は理菜ちゃんのことが好きなんだろ？　見てりゃ分かる」
凛子「いいじゃん。なんでそんな思い詰めてんのよ」
高橋、首を横に振る。
高橋「俺が魁の弟で、しかも冤罪を証明しようとしてるって知ったら、理菜には辛い思いをさせると思う」
凛子「それは……」
高橋「だから、もうやめる」
佐々木「やめるってお前……」

高橋「もう1秒も無駄にできない。魁の無実を証明するためなら、俺はなんだってする」
凛子「湊……」
白水「それで。具体的にどうすんだ？」
高橋「（真剣な顔で）それなんだけど。マスター、あと2人にも。頼みがある」
高橋、真剣な顔で白水と佐々木と凛子の方を向く。

○三田大学・講義室内
授業が終わり、学生たちが教室を出ていく。
鈴木理菜（18）、筆記用具や資料を鞄に仕舞っている。
夏凛「湊くん来なかったね。何か聞いてる？」
理菜「（裏返る）へ？　な、何も!?」
と、明らかに動揺。
高橋が扉から出て行くのが見える。
夏凛「あ、いた。湊くーん！」
高橋、振り返る。

親友・花村夏凛（１８）、高橋に駆け寄る。

夏凛「今日来ないかと思った」

高橋「後ろの方いた」

理菜、気まずそうに夏凛の後ろから高橋を見る。

しかし高橋とは目が合わない。

夏凛「お昼一緒に食べようよ」

高橋「あ～」

と、理菜を見て、

高橋「やめとく」

理菜Ｍ「え？」

理菜を真っ直ぐ見ている高橋。

夏凛、理菜と高橋のただならぬ空気を察する。

夏凛「そっかぁ残念。またね」

高橋「うん」

高橋、教室を出ていく。

理菜、目を伏せて立ち尽くしている。

夏凛「（顔を覗き込むように）理菜？」

理菜「（顔を上げて）食堂行こ！　早くしないと席なくなっちゃう」
と、明るく歩いていく。
夏凛、不審そうに理菜を見る。

○同・食堂
学生で賑わっている。
理菜と夏凛も向かい合ってごはんを食べる。
理菜、ラーメンに息を吹きかけて啜る。
理菜「（明るく）ん～これ美味しいよ。夏凛も食べてみる？」
夏凛、理菜をじっと見つめる。
理菜「……なに？」
夏凛「怪しい。さっきからカラ元気なんだよなぁ」
理菜「な、何言ってんの～いつも通りだよ」
夏凛「湊くんと何かあったでしょ？」
理菜、目を泳がせる。
夏凛「まぁ無理に話さなくてもいいけどさ。

何か悩みがあるなら話してごらんよ。理菜はすぐ1人で抱え込むから」

理菜、箸を置く。

理菜「……あのね」

夏凛も食事の手を止める。

夏凛「うん」

理菜「……キス、したの」

夏凛「湊くんと？」

理菜「……うん」

夏凛「（ニヤニヤして）やったじゃん。それでそれで？」

理菜「でも、その後何事もなかったように全然普通で。なんなら、避けられてると気がするの。さっきも……」

夏凛、さっきまでの笑顔が消える。

理菜「キスした後ね、ひと言『ごめん』って。それだけ言われたの」

夏凛「そっか……」

理菜「あれは湊くんにとってはなんでもない、ただの気まぐれってことなのかな？　（泣

きそうな声で）キスしてみたけど、やっぱコイツ違ったわみたいな？」

夏凛、顔を歪めて理菜を見る。

夏凛「湊くんが何を思って理菜にキスしたのか、キスして何を思ったのか、本当のところは分かんない」

理菜「だよね……（顔が暗くなる）」

夏凛「でも、理菜が好きになる人は、テキトーな気持ちで女の子にキスするような、そんな人じゃない。それは分かる。だって、理菜が好きになった人だもん」

理菜「夏凛……」

夏凛「だからさ。やっぱり湊くんとちゃんと話さないと。ね！」

理菜「（目を潤ませながら）うん。頑張る」

と、頷く。

夏凛「ほら～ラーメン伸びちゃうよ！　ひと口ちょうだい！　私のからあげもあげる！」

理菜と夏凛、自分たちの料理を交換する。

○バー・店内（夜）
スタッフは理菜と白水。
カウンター席には佐々木と凛子。
扉が開いて高橋が若い女性と店内に入ってくる。
理菜「っ……」
と、言葉に詰まる。
白水「（いつも通り）いらっしゃい。奥いいぞ」
高橋と女性が空いているテーブル席に座る。
理菜、無意識に２人を目で追う。
高橋と女性は距離が近く、楽しそうにメニューを見て話している。
理菜Ｍ「本当は見たくなんてないのに。彼女は一体誰で、湊くんとどういう関係なのか。気になって目が離せない」
白水「理菜ちゃん、湊たちの注文聞いてきてくれる？」
理菜「……はい」

理菜、高橋たちのテーブルに行く。
大きく息を吸って、
理菜「（精一杯口角を上げて）お決まりですか？」
高橋「シャンディガフ２つ」
理菜「珍しいね。湊くんがそういうの飲むの」
高橋「そう？　俺シャンディガフ好きだよ」
理菜、言葉に詰まるが、
理菜Ｍ「頑張るって決めたじゃん！」
理菜「（女性に手を向けながら）お友達？」
と、切り返す。
女性「（ニコニコしながら）え～どうだろ。（高橋を見て）〝友達〟ではないよね？」
高橋、女性を優しい目で見つめながらテーブルの上の女性の手に自分の手を重ねる。
高橋「友達ってこういうこともすんだっけ？」
と、女性の耳元に唇を寄せてイチャイチャ。
理菜「やだ私、超ＫＹだね。邪魔者は退散し

まぁーす！」
と、おどけて敬礼してカウンターに戻る。
ずっと口角を上げている。
理菜「シャンディガフ２つです」
白水「珍しいチョイスだな」
理菜「ですよね。私も思いました……」
佐々木「アイツ、また女の子代わった？」
凛子、佐々木を叩いて制する。
凛子「（理菜をわざと気にしながら）ちょっと！」
理菜、口角を上げたまま。
理菜「綺麗な人ですよね～」
理菜の視線の先には高橋と女性。
顔を近づけて話しながら２人だけの世界に入っている。
理菜Ｍ「大丈夫。頑張れ私」
×　×　×
理菜、高橋と女性を扉まで見送る。
女性は高橋の腕に手を絡め、密着して

いている。

理菜「ありがとうございました」

理菜、扉を閉めてゆっくり息を吐く。

カウンターに戻り、

白水「気になる？」

理菜「（明るく）何がですか？」

白水「湊たちのこと」

理菜「いい感じでしたよね。お似合いだったな～」

白水「理菜ちゃんにどう見えてるかは分からないけど、アイツは元々あんな感じの男だから。恋人にするのはお勧めできないかな。やめといた方がいいよ」

理菜「あはっ。もう、マスター何言ってるんですか。そんなんじゃないですよ～」

白水「理菜ちゃんのことちゃんと大事にしてくれる人を選んだ方がいい」

理菜「（元気に）はぁーーい！」

と、必死に平静を装う。

○駅前・ロータリー（夜）
高橋と女性が歩いている。
女性は高橋の腕に抱きついたまま。
高橋「家どこらへん？」
女性「目黒。タクシーですぐだよ」
と、上目遣いに高橋の腕に胸を押し付ける。

○同・タクシー乗り場（夜）
高橋、ドアが開いたタクシーに女性を先に乗せる。
高橋、運転手に向かって
高橋「すいません目黒まで」
と、1万円札を渡す。
しかし高橋は乗り込まない。
女性「え、乗らないの？」
高橋「今日はどーも。気をつけて」
と、ドアを閉める。

○タクシー・車内（夜）

タクシーが動き出す。
女性、窓ガラスにへばりついて高橋を見る。
女性「ちょっとなんなの!?　アンタから声かけて来たくせに！」

○同・タクシー乗り場（夜）
高橋、女性の乗った車が見えなくなるまで見送る。
スマホの時間を確認すると２３時。
高橋Ｍ「そろそろか」
と、来た道を戻る。

○バー・店内（夜）
理菜「お疲れ様でした！」
と、扉を開ける。
白水「あ、ちょっと！　タクシー呼ぶから！」
理菜「大丈夫です！　自分で呼びます！」
と、店を出る。
理菜が店を出てから、

凛子、カウンターに突っ伏す。

凛子「〝あーー！　すごい罪悪感。理菜ちゃん必死に笑顔保ってたね……」

佐々木「あんな小芝居までする意味あったんですかね。正直に全部話せばいいんですよ。そりゃあ、すぐには分かってもらえないだろうけど……」

凛子「でも実際問題、魁くんがやってないっていう決定的な証拠は未だに掴めてないからね。それで理解してもらうなんて難しいよ」

白水「これが正しかったかどうかなんて誰にも分からないよ。でも、湊なりに悩んだ末に出した答えを、俺は尊重したい」

〇大通り・歩道（夜）

人通りはほとんどない、街灯が灯る歩道。

理菜、はりついた笑顔を必死に保っているが、涙が頬をポロポロ溢れていく。

夏凛に電話をかける。以降、電話の様子。

夏凛の声「もしもーし」

理菜「（鼻声で）ごめんね夜遅くに」

夏凛の声「いいよ全然。ゴロゴロしてただけだし。何かあったんでしょ？」

理菜「（明るく）今日ね、湊くんが女の人とバーに飲みに来たんだけど、それがもうすごい綺麗な人でね！　私多分これ遠回しにフラれた！　まだ告白もしてないけど！」

夏凛の声「待ってよ。なんでそうなるの！　ただ友達と飲みに来てただけかもしれないじゃん！」

理菜「あれは友達って雰囲気ではなかったんだよね。（明るく）なんか見せつけられちゃった！」

夏凛の声「でも……」

理菜、涙が止まらず鼻を啜り出す。

理菜「片思いもダメなら諦めるから。だからせめて、今までみたいに戻りたいっ……」

と、頬の涙を拭う。

○アパート・正面（夜）

理菜、自分の部屋に入る。

ドアが閉まってから、アパートの正面に到着する高橋。

悲痛な表情で理菜の部屋のドアを見て、自分の部屋に入る。

○三田大学・食堂

窓際の席で話し込む夏凛と親友・市川拓也（１８）。

夏凛「というわけなの」

市川「なるほど。で、その高橋が理菜にした思わせぶりな行動って具体的にどういうことなんだよ」

夏凛「それは、まぁ……その……とにかく、湊くんの自分勝手な行動のせいで、理菜が振り回されてるの！　自分が何かしたんじゃないかって気にしてる。どう思う!?」

市川「どう思うって……最低だとは思うけど」
夏凛「けど、なに？」
市川「なんか想像つかないんだよ。知り合ったばっかのはずの理菜のことあんなに気にかけてたヤツが、急に態度変えるって……もちろん理菜のせいではないだろうけど、なんか理由があんじゃねーの？」
夏凛「へぇ～。拓也、湊くんの肩もつんだ。今まであんなに突っかかってたくせに」
市川「そういうわけじゃないけど。ただ、理菜のことに限ってアイツがそんな風になるのが違和感だなって」
夏凛「あぁーーーーーー」
と、天井を見る。
勢いよく元に戻って、
夏凛「やっぱ無理！　じっとしてらんない！」
と、立ち上がって走り出す。
市川「は!?　どこ行くんだよ！」
と、夏凛を追いかける。

○同・自習室

高橋、1人で勉強をしている。

夏凛がやってきて、

夏凛「湊くん」

と、声をかける。

高橋、顔を上げる。

夏凛を追いかけてきた市川が追いつく。

夏凛「ちょっといい？」

高橋、ノートを閉じ立ち上がる。

○同・建物裏

夏凛の後ろに高橋と市川が続く。

誰もいない場所で立ち止まる。

夏凛「ごめんね急に呼び出して」

高橋「なに？」

夏凛「（深く息を吸って）私が口出すべきじゃないのは分かってるけど、でも言わせてもらう。その気がないなら、なんで理菜に思わせぶりなことしたの？　心当たりあるよね？」

市川、壁に寄りかかって高橋の様子を伺う。
高橋「あぁ。キスのことね」
市川が反応する。
高橋「まさか本気にされると思わなかったからさ。俺も反省してる。だから今はもう必要以上に絡んでないよ」
夏凛「ちょっと待って。それ本気で言ってる!?」
高橋「（鼻で笑って）え、なに。ダメ？」
夏凛「湊くんだって、理菜のこと……！」
夏凛、途中で言うのをやめる。
高橋も何も言わない。
市川、いつもより低いトーンで、
市川「夏凛。もういいって」
と、夏凛を連れて行こうとする。
落ち着いているが怒りをはらんだ声。
市川「お前の考えはよく分かった。ならもう２度と理菜に関わんな」
夏凛、納得していない顔。

市川、夏凛の手を引いてその場を離れる。
高橋はその場にポツンと残される。

○同・食堂（日替わり）
学生で賑わっている昼時。
テーブルで市川、同級生・西原圭吾（１８）、成宮翔（１８）がご飯を食べている。

成宮「あ、おーーい！」
席を探してウロウロしている理菜と夏凛を見つける。
手を振りながら近づいてくる２人。
理菜は笑顔だが覇気がない。

市川Ｍ「あれからアイツは、本当に理菜と関わらなくなった」

夏凛「一緒していい？」

成宮「もちろん。あれ、今日湊くんいねーの？」

目を見合わせる夏凛と市川。

西原は何かに気づく。
理菜「（明るく）授業は出てると思うけど
……最近あんまり一緒にいないから分かん
ないね」
と、夏凛に話を振る。
夏凛「そ、そうなんだよね！」
成宮も何かを察して、
成宮「ふーん。そっか！」

○同・購買内
市川、飲み物を選んでいると高橋が店
内に入ってくるのが見える。
咄嗟に背を向ける。
大学院生Ａの声「え、もしかして竹内？」
市川、そっと後ろを振り返ると、大学
院生Ａに話しかけられた高橋が固まっ
ている。
大学院生Ａ「あ、ごめん苗字違うんだっけ。
久しぶりじゃん。俺のこと覚えてる？」
※　※　※

（フラッシュ）
同級生「よく学校なんて来れるよな。人殺しの弟～」
※　※　※
高橋、目を合わせず、
高橋「（ボソッと）多分人違いだから」
と、早歩きで店の外へ出ていく。
大学院生B「どした？　知り合い？」
大学院生A「だと思ったんだけど、否定された」
と、笑って店を出る。
市川も慌てて後を追いかける。

○同・キャンパス内
ビニール袋を持って歩いている大学院生A。
市川「あの！」
と、走りながら大学院生Aを呼び止める。
大学院生A「えっと……誰？」

市川「すいませんいきなり。さっき購買で話してたヤツ、知り合いなのかなって……」
大学院生A「さっきのヤツって……あー竹内？　知り合いっつーか、まぁ中学の同級生だけど。（不審そうに）それがどうかした？」
市川「（大げさに）あぁ～ね！　俺アイツと高校一緒だったんだけどさ、昔から全然友達いないから、俺以外の人と話してんの見て驚いちゃって。そっか、同中だったのか！」
大学院生A「へぇ～。でもアイツ高校すぐ辞めたんだろ？」
市川「（演技）そ、そうそう、ほんとすぐ辞めてさ～」
　大学院生A、フッと笑って、
大学院生A「まぁしょうがないよな。わざわざ家から遠い高校選んだっぽいけど、田舎じゃ大抵の話は筒抜けだし。誰の母親と父親が不倫してたとか、担任が女連れてホテ

ル入って行ったとかさ」
市川「（演技）ハハッ、ほんとそれな～」
大学院生A「アイツ一生言われ続けんだろうな、人殺しの弟って」
市川、目を見開いて固まる。
市川M「人殺しの弟？　何言ってんだコイツ……」
市川「人殺し……？」
大学院生A「まさか知らないわけないよな？　アイツの兄貴、殺人で捕まったじゃん」
市川「あ、あぁーあれか、あれな……」
と、話を合わせるが動揺を隠せない。
市川「ごめん、俺もう行かなきゃ……」
と、来た道を早歩きで戻る。
大学院生A「なんだよ。変なやつ……」

〇同・門の前
市川、西川と成宮とすれ違う。
西川「おい、拓也どこ行くんだよ」
と、声をかけるが聞こえていない。

市川は深刻な顔で足早に門を出て行く。
西川と成宮、不思議そうな顔をする。

○街中・路地裏

市川、呼吸が荒い。
周囲に誰もいないことを確認してスマホで【長野　殺人　竹内】と検索。
新聞社の記事が出てくる。
ごくりと息を呑んで開くと【古諏訪夫婦殺害事件】から９年経った旨と、被害者・前田聡、前田明日香の名前、そして犯人・竹内魁が無期懲役で服役中のことが書かれている。

市川「これって理菜の……」

市川、今度は【竹内魁　弟】と検索。
ネット掲示板のページが出てくる。
【竹内○って同級生だわ】【北諏訪中】【確か母子家庭】【弟いたよな？】【竹内み○○】など個人情報が出ている。

市川、辛くなってページを閉じる。
市川M「もしこれが本当なら……」
成宮「拓也」
市川、成宮の声にビクッとする。
西川「大丈夫か？　なんか怖い顔してたけど」
市川「うん、なんでもない」
と、スマホをしまう。

○ファミリーレストラン・店内（夜）
夕食時で満席の店内。
店に入ってきた夏凛、きょろきょろ誰かを探す。
市川、奥の席から手を挙げて夏凛を呼ぶ。
夏凛、市川に気づく。
夏凛「お待たせ」
市川「わざわざごめん」
夏凛「全然いいんだけどさ、明日大学で話すんじゃダメだったの？　お風呂入っちゃってたからどスッピンなんだけど」

市川「理菜に聞かれたくなくて」
夏凛、顔色を変える。
市川、スマホで古諏訪夫婦殺害事件の記事を見せる。
夏凛「これって……理菜のお父さんとお母さんのやつ？」
市川「（頷いて）この犯人」
夏凛「（画面を見ながら）竹内……かい？確か今刑務所にいるんだよね。あ、そう無期懲役って。これがどうかしたの？」
市川「コイツ、高橋湊の兄貴なんだよ」
夏凛、３回瞬きをする。
夏凛「え？　湊くんの？　ちょっと何言ってんの拓也……」
市川「今日購買で高橋のこと竹内って呼んでる人がいたんだよ。多分うちの院生。その人に話聞いたら、高橋とは中学の同級生で、人殺しの弟だって」
夏凛、混乱している。
夏凛「待って。このこと理菜は知らないよね

!?」
市川「知らないと思う」
夏凛「湊くんは……？」
市川「アイツは知ってたと思う。むしろ、知ってて理菜に近づいてきたなら色々納得がいく。ずっと変だと思ってたんだよ。社交的なタイプじゃないのに、理菜のことは妙に気にかけてるし、まるで出会う前から理菜のこと知ってたみたいにさ」
夏凛「でもなんで理菜に近づいてきたの？何のために？」
市川「それは本人に聞かないと分かんない」
夏凛「ダメだ。頭が混乱してる」
と、頭を抱える。
市川「悪い。俺も、なんか自分だけじゃ抱えきれなかった」
夏凛「これからどうしよう……もし仮に今の話が本当だとしても、悪いのはお兄さんであって、湊くんに罪はないもんね」
市川「でも意図的に理菜に近づいて来たんだ

としたら、俺はほっとけない。そこはハッキリさせた方がいい気がする」
夏凛「そっか……とにかく、一度湊くんに確かめるしかないね」
市川「うん……」
店員「お客様。ご注文お決まりでしょうか？」
夏凛「すいません」
市川「すぐ決めます」
×　×　×
夏凛と市川、食事をしながら、
夏凛「理菜が事件のこと私たちに話してくれた時のこと覚えてる？」
市川「もちろん。忘れるわけないじゃん」
○（市川の回想）中学・教室内（休み時間）
理菜（１２）、机の中から教科書を出す。
市川「理菜大丈夫？」
理菜、顔をあげて、
理菜「え、何が？」

市川「昨日休んでたじゃん」
隣の席の夏凛（１２）も会話に加わる。
夏凛「風邪？」
理菜「いや……」
市川「どうせ食べすぎてお腹でも壊したんだろ」
理菜「（愛想笑いして）あはは。そんな感じ」
夏凛と市川（１２）、顔を見合わせる。
夏凛「（心配そうに）本当に大丈夫？」
と、理菜の額に手を当てる。
理菜「え？」
夏凛「だっていつもなら『そんな食いしん坊じゃないから！』とか言うのに。拓也もそれ期待して言ったいつものイジりだよ。ね？」
市川「そうだけど……なんか俺がミスったみたいになるからそれ以上言うなって」
理菜「あ、あぁ～！　そうだよね、ごめんごめん」
と、誤魔化す。

○（市川の回想）同・下駄箱（夕方）
理菜、夏凛、市川がそれぞれ別の列で上履きを仕舞ってローファーを出している。
夏凛「今日どっか寄って帰ろうよ」
市川「さんせー」
夏凛「理菜はー？」
理菜、一足先に靴を履いて現れる。
理菜「……あのさ。２人に話したいことがあるんだけど、いいかな？」
理菜「もちろんいいよ」
市川「じゃあカラオケにする？　個室だし」
理菜、頷く。

○（市川の回想）カラオケ店・個室（夕方）
理菜と斜めになるように夏凛と市川が座る。
理菜「昨日私が休んだ理由なんだけど……」
夏凛「うん……」
理菜「パパとママのお墓参りに行ってたの。

毎年命日には必ず行ってて」
夏凛「でも体育祭の時理菜のお父さんとお母さん来てたよね……？」
理菜「お父さんとお母さんは私を引き取ってくれた育ての親。パパとママは９年前に殺されたの」
夏凛と市川、絶句する。
理菜「家に入ってきた男の人にたくさん刺されたの。私も家にはいたんだけど、隠れてたから助かった。もうね、犯人も捕まってて……」
と、声が震える。
夏凛、そっと理菜の手を握る。
夏凛「理菜」
市川「無理すんな。ごめん俺たちが休んだ理由聞いたりしたから。嘘つきたくなかったんだよな」
理菜、首を横に振る。
理菜「それだけじゃなくて。こんなこと話しても困らせると思うけど、でも２人には私

のこと話しておきたかった。聞いて欲しかったの」

市川「困ったりするわけねーじゃん。俺らはいつでも理菜の味方だよ」

夏凛「そうだよ。話してくれてありがとうね」

夏凛、理菜のことを抱きしめる。

理菜、夏凛の腕の中で、

理菜「ありがとう。２人とも」

（市川の回想おわり）

〇ファミリーレストラン・店内（夜）

夏凛「殺人事件ってニュースでは見るけど、どこか他人事で、まさかこんな身近で被害に遭った人がいたなんてビックリして。あの時、必死に落ち着いてるフリしてた」

市川「俺も」

夏凛「あの時は、なんて声かければいいのかとか、私なんかが触れていい話題じゃないなと思って悩んだりもしたんだけど。あの後拓也に言われた言葉が私の中にスッと入

ってきたんだよね」
市川「俺なんて言ったっけ？」
夏凛「忘れたのー？　『被害者の可哀想な子、じゃなくて、理菜には鈴木理菜ってちゃんと名前がある。理菜の過去に何があろうと、俺らはそれも含めて友達なんだ』って」
市川「そうだっけ」
夏凛「結局、理菜の気持ちを想像することはできても、経験したことのない私たちは、あくまで想像しかできない。だから私たちはとにかく、理菜にとって安心できる場所で居続けようって話したじゃん」
市川「それは覚えてる。もちろん今もそう思ってるし」
夏凛「うん。そうだね！」

○アパート・高橋の部屋の中
高橋、タブレットで事件の資料を読んでいる。
ピンポンと呼び鈴が鳴り、玄関のドア

を開ける。
ドアの前には市川と夏凛。
市川「ちょっと話がある」
高橋、小さくため息をつく。
市川、部屋の中に視線を向ける。
高橋、それを遮るようにドアを閉めて外に出る。

○住宅街・公園の中（夕方）
たこの滑り台に寄りかかる高橋。
高橋「（気怠げに）今度はなに？」
言いづらそうにする市川と夏凛。
高橋「用ないなら行くよ」
と、公園から出て行こうとする。
市川「単刀直入に聞く。お前、竹内魁の弟なのか？」
足を止める高橋。
目を閉じて息を吐く。
市川、高橋の方へ行って肩を掴む。
市川「なぁ、どうなんだよ！！」

高橋「（淡々と）そうだよ。竹内魁の弟。俺は苗字が変わったけど、本名は竹内湊」

目を見開く夏凛と市川。

市川「じゃあ理菜が誰なのか知ってたんだな？」

高橋「あぁ知ってた。９年前に亡くなった前田夫妻の一人娘・前田理菜だって」

市川「亡くなったって……お前の兄貴が殺したんだろ!?」

と、高橋の胸ぐらを掴む。

高橋、特に抵抗せず真顔で市川を見つめる。

夏凛「なんで……理菜が湊くんのこと知ったらどんな気持ちになるか考えた!?　どういうつもりなの!?」

高橋「説明したって、どうせ理解できないだろうけど」

高橋、市川の手をどける。

高橋「あの子にはもう関わってないからいいだろ。ほっといてくれ」

市川「ふざけんな。今は関わってないとしても、理菜のことを知って近づいたのは事実だ。その説明はきっちりしてもらう」
夏凛も真剣な目で高橋を見つめる。
高橋「……魁は無実だ。誰も殺してなんかない。真犯人は別にいる」
市川「は……何言ってんだよ。こっちは真剣に聞いてんだよ！」
高橋「こっちだって大マジなんだよ！」
夏凛「まさか冤罪だって思ってるの……？」
高橋「思ってるじゃない。冤罪なんだ。魁は犯人じゃない」
市川「頭大丈夫か？　お前の兄貴は警察に逮捕されて、裁判で刑も確定したんだぞ！」
高橋「それが間違ってるって言ってんだよ」
市川「じゃあ証拠は？　お前の兄貴が犯人じゃないって証拠！」
高橋「それは……まだない」
市川、鼻で笑う。
市川「そんなんではいそうですかなんて信じ

られると思うか？」
高橋「別に２人に信じてもらおうなんて思ってないから」
市川、むっとする。
夏凛「でも、理菜に近づいたのは何で？　事件のこと聞き出そうとしたの？」
高橋「犯人はあの時殺せなかった理菜を多分狙ってる。だからそばにいれば、必ず犯人が接触してくると思った」
市川「なんだよそれ……」
夏凛「それで理菜のこと探し出して、わざわざ同じ大学に入ったの？　理菜に気があるフリして手懐けて、全部利用するため!?」
高橋「……確かに、最初はそれが目的だった。けど……」
バサっとビニールが地面に落ちる音がする。
３人が音の方を向くと、公園の入り口で立ち尽くす理菜。
（了）